

画家・小泉斐

若き日の出会いと旅

江戸時代後期の画家で、下野国益子（栃木県益子町）で生まれた小泉斐（号壇山、1770～1854）。画家であり、黒羽藩に仕える神官としても活躍した斐の若き日の出会いには、宇都宮ともゆかりのある近江国（滋賀県）出身の商人たちが深くかかわっていました。

1

Koizumi Ayaru's History

下野・近江・水戸を結ぶ 若かりし斐の交友関係

栃木県立博物館主任 深沢 麻亜沙



図1
小泉斐筆
「鮎図」
天明8年(1784)
個人蔵

現在の宇都宮市二荒町と馬場通り三丁目付近には、昭和時代まで日野町という町名がありました。今もそこには日野町通りがあり商店が並んでいます。その町の歴史は古く、慶長3（1598）年、近江国日野（滋賀県日野町）生まれの蒲生秀行が宇都宮城に入封したのを機に日野の商人が宇都宮に訪れ、秀行が彼らを御用達商人として取り立てたことに始まります。

近江国出身の商人たちは、江戸時代に入ると他国に出店を設け、本宅のある近江と出店先を行き来し商いを行いました。これらの人たちを広義では近江商人といい、さらにそれぞれの出身地ごとに日野商人や八幡商人などのグループに分類されます。近江国にゆかりのある店は栃木県内に今も多く残り、スーパーがましんや島崎酒造、外池酒造など、私たちにとても身近な存在です。このように、宇都宮の地名や、なじみのある店のルーツに実は

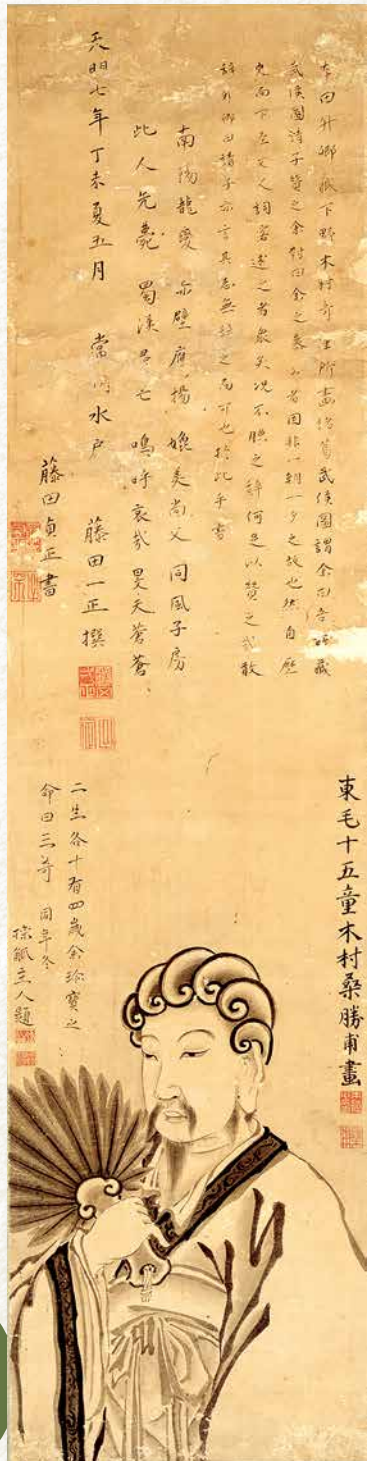


図2
小泉斐筆
「諸葛孔明像」
天明4年(1784)
個人蔵

近江商人が関わっているのです。下野国が誇る郷土の画家・小泉斐もまた、近江商人と深い繋がりがありました。

斐という鮎を主題とした絵（図1）が特に有名で、今もなお人気を集めています。その斐の絵の師匠こそ日野商人の島崎雲圃（1731～1805）でした。

雲圃は茂木に店を構えていた栄屋の三代目。茂木と日野を行き来する生活を送っており、斐もまた雲圃に従い日野へ足を運んでいます。雲圃のもとで絵を学び多くの作品を描いた斐でしたが、一方で神主という顔も持っていました。斐はもともと益子の神官・木村市正の家に生まれ、十八世紀末頃に那須にある大宮温泉神社の小泉家の養子となって同社を継ぎ、文政2（1819）年以降は黒羽藩主大関増業（1782～1845）・増儀（1811

水戸との繋がりは、おそらく水戸藩士で彰考館総裁を務めた立原翠軒（1744～1823）と雲圃との関係性の中で育まれたものでしょう。雲圃と翠軒は、雲圃の没後に翠軒がその墓碑銘を撰したほどの間柄でした。師の雲圃との出会いがさらなる出会いを呼び、若年期の研鑽が小泉斐という下野国を代表する画家を生んだといえます。

水戸との繋がりは、おそらく水戸藩士で彰考館総裁も務めた立原翠軒（1744～1823）と雲圃との関係性の中で育まれたものでしょう。雲圃と翠軒は、雲圃の没後に翠軒がその墓碑銘を撰したほどの間柄でした。師の雲圃との出会いがさらなる出会いを呼び、若年期の研鑽が小泉斐という下野国を代表する画家を生んだといえます。



図3
小泉斐筆
「蛙写生図」
寛政6年(1794)
個人蔵

寛政七年の旅 西に遊んだ斐

栃木県立博物館学芸企画推進員 久野 華歩

寛政7（1795）年3月、師・島崎雲圃の近江日野への帰郷に従っていた小泉斐（当時、木村章蔵）は、立原翠軒を長とする水戸藩士ら6名と合流し、『大日本史』編纂のための調査を目的とした関西旅行に赴いています。この西遊で得た見聞や上方文人らとの交流は、のちの斐の画業に大きな影響を与えました。

西遊における斐の足跡は、翠軒ら水戸藩諸士の日記からうかがい知ることができます。彼らの主な行き先は京・伏見・宇治・奈良・飛鳥・吉野・大坂などで、各地の寺社等を巡り、古碑や扁額の拓本採取、書画の模写を行いました。現在遺る斐の資料には、それに関連するものを見つけることができます。たとえば図4は、一行が宇治橋のたもとにある老舗の通圓

茶屋で休憩した際、現在も同店の店頭に安置される木造狂言通圓像（図5）を斐が忠実に写し取ったものです。また、斐が後年制作した『檀森斎石譜』という石の図譜には、この西遊で写した「大和国高

市郡橘寺三光石」（図6）や「吉野金峰足摺石」といった図を載せています。旅の目的の文化財だけでなく、彼らが道中に出会ったさまざまな興味引かれるものを記録し写し取っていた様子がよくわかります。

さらに、古物調査だけでなく、多くの文化人らとの交流も注目されます。皆川淇園（1734～1807）をはじめとする京の人々のほか、大坂では上方随一の好事家・木村兼葭堂（1736～1802）所蔵の書画を写しているのです。そのことは兼葭堂から紀州の画家・桑山玉洲（1746



図5
狂言通圓像
室町時代(15世紀)
京都府宇治市・通圓茶屋蔵

図4
小泉斐筆
「檀森斎遺稿」
巻三
江戸時代(18～19世紀)
東京都立中央図書館
特別文庫室蔵



（1799）に宛てられた書簡（和歌山市立博物館蔵）でも確認できます。このとき兼葭堂は、翠軒とともに訪れた斐を「水戸画工木村庄蔵」と認識していたことは興味深いものです。西遊の旅の後半、体調を崩しがちだった斐は、京に向かう翠軒らと別れ、仲間の藤田幽谷（1774～1826）とともにしばらく大坂に滞在し、兼葭堂の蔵書の模写を続けました。ここで

の古書画の見聞は、その後の作画活動の大きな糧となったと想像されます。

そして再び京で翠軒らと合流したのちの7月、数か月にわたる西遊の締めくくりに一行は富士登頂を果たしたのです。このときの過程を描いた斐の富士登山図は、体験者のみ知り得る富士山の姿を迫真的に

図6
小泉斐筆
「檀森斎石譜」
江戸時代(19世紀)
東京都立中央図書館
特別文庫室蔵

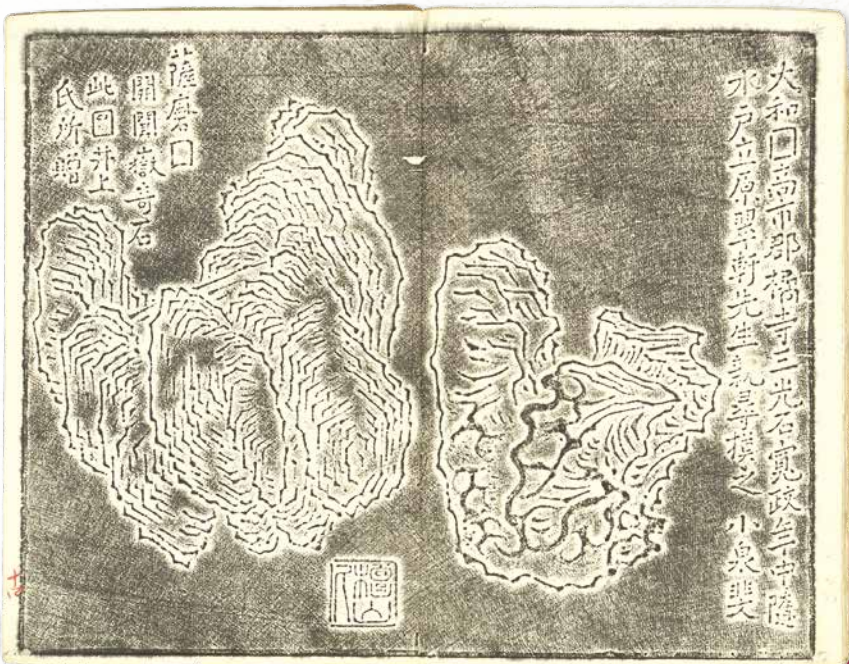


図7
小泉斐筆
「富岳写真」
弘化3年(1846)刊
栃木県立博物館蔵



捉えるものでした。その富士登山図は、谷文晁（1763～1840）をはじめとする多くの画家に影響を与え、また京で知り合った淇園を介して高貴な立場の者にも上覧されたといえます。それから歳月を経て、門人たちの尽力のもと出版された版本『富岳写真』（図7）は、斐の晩年を飾る記念碑的作品となりました。

知られざる下野の画家小泉斐のこれまで知られざる若年期の活動は、江戸時代後期の文化人たちの動向を知る上でも大変興味深いものです。たくさんの人々の繋がりが、文化の華を咲かせていた時代、斐もまたその流れのなかで育まれた一人だったのです。

栃木県立博物館

企画展
「生誕250年記念 偉大なる無名画家 小泉斐」

6月15日(日)まで

画家小泉斐の生誕250を記念し、その足跡を追った回顧展。斐の作品を中心に、師や弟子、親交のあった文化人らの関連資料をあわせて展示することで、下野が誇る偉大な無名画家の魅力に迫ります。（同館チラシより）

一般=260円／大・高校生=130円／中学生以下無料

栃木県立博物館 ☎028-634-1311

※ 新型コロナウイルス対策により休館、延期になる場合がありますので、お出かけの際は事前にお確かめください。詳しくはホームページ等でご確認ください。